地域がん診療連携拠点病院

第16回市民公開講座「緩和ケア病棟開設20周年

山本和秀 院長

石原辰彦 診療部長

9月1日（土）、岡山済生会総合病院管理棟4階さいゆうホールにおいて第16回市民公開講座を開催しました。定員を上回る多数の応募があり、当日は298名の方々にご参加いただきました。山本院長の挨拶の後、石原診療部長（緩和ケア科）が「緩和ケア病棟20年の歩み」として当院の緩和ケア病棟の歴史について講演を行いました。

はじめに、1983年に「生と死を考える会」が発足し、そこから緩和ケア病棟を立ち上げるまでの経緯についてお話ししました。そして、緩和ケア病棟が開設されてから20年の間に変化してきた「緩和ケア病棟が担う役割」についても説明しました。

現在の緩和ケア病棟は、「末期がん患者が『終の棲家』として療養する場所」というだけでなく、「早期の患者に対して苦痛の緩和をはかる」「在宅医療を支援する」といった役割も担うようになってきており、患者さんの生活に合わせたケアが可能になってきている、とのことでした。

最後に、「I HAVE A DREAM」として、「緩和ケアが当たり前のように浸透し、緩和ケア病棟が特殊な病棟という認識がされない世の中になってほしい」という未来への夢を語りました。

緩和ケア病棟が開設されるまでの過去の話から、現在・未来についてもお話しし、当院の緩和ケアについて、より一層理解が深まる講演となりました。

引き続き、石原診療部長を座長として淀川キリスト教病院の柏木先生に講演いただきました。

講演内容は「良き生、良き死」という重いテーマでしたが、ところどころユーモアを交えながらのお話に、会場にも笑いがこぼれていました。

講演の冒頭、「死が追いかけてくる」という、30歳で刑死した吉田松陰の言葉などを例に、「死」との距離について話されました。「『生』の延長線上に『死』があるのではなく、人は日々、死を背負って生きているのだ」という言葉が印象的でした。

淀川キリスト教病院
前理事長
柏木哲夫 先生

記念講演」を開催しました

講演の半ばでは、実際に看取ってきた患者さんを実例に挙げながら、「良き生、良き死」について考えを話されました。2,500人にのぼる患者さんを看取ってきた中で先生が感じたことは、「人は生きてきたように死んでいく」ということでした。周りに不平不満を言いながら生きてきた人は、死に際でも不平を言いながら亡くなり、周りに感謝をして生きてきた人は、死に際でも感謝をしながら亡くなる。つまり、「良き死」を迎えるためには、まずは「良き生」を生きることが大切、とのことでした。

「良き生」を送るために大切なこととして、「感謝する人生」「散らす人生（人のために時間を使う人生）」「ユーモアがある人生」の3つを挙げられていました。人に感謝をし、人のために時間を使い、ユーモアで人を笑顔にすること。それら3つを日々行うことが「良き生」を送るために必要なことだと先生は話されました。

そして最後に、先生の考える「良き死」についてお話しされました。「良き死」を迎えるためには、苦しみがないことは勿論だが、それ以上に「たましいの平安」があるかどうかが重要である、と話されていました。「たましいの平安」とは、死に対する恐怖心がない状態で亡くなること。死が終わりではなく、またいつか親しい人と会えるという「再会の希望」をもつこと。そうした「たましいの平安」があれば、苦しみや恐怖の少ない「良き死」に繋がるのではないか、と話を締めくくられていました。

さまざまな実例を挙げて、「良き生、良き死」についてわかりやすく、かつ、ユーモアに溢れた今回の講演は、来場者の方々の心に深く残ったのではないでしょうか。

普段はあまり考える機会のない「生と死」について、改めて考えさせられる大変有意義な時間となりました。

（医学資料室事務員　三村 望）